

財政破綻、少子高齢化時代をどう生きる

—『二宮尊徳に学ぶ』の講義概要—

八幡正則〔鹿児島大学稲盛アカデミー非常勤講師〕

It lives how in the finance failure, the declining birthrate and a growing proportion of elderly people times. —The syllabus of "learning from Ninomiya Sontoku"—

HACHIMAN Masanori [Part-Time Lecturer, Kagoshima University, Inamori Academy]

キーワード：財政戦略と報徳仕法、二宮尊徳の知行合一、天道と人道、至誠・勤勉、分度・推譲

—目次—

1、はじめに

- ①国家財政戦略と「尊徳仕法」
- ②『二宮尊徳に学ぶ』を講ずる

2、今、なぜ二宮尊徳か

- ①内村鑑三の『代表的日本人』に登場する二宮尊徳
- ②GHQが高く評価した「二宮尊徳」
- ③「偽」の横行する日本＝心田の開発を説く二宮尊徳

3、私と「二宮尊徳」との出会い

4、報徳思想に立つ『伝兵衛愛農塾』

- ①『伝兵衛愛農塾』の創設
- ②塾報に『二宮尊徳に学ぶ』の連載を始める

5、講義をどう設計したか

- ①講座名について
- ②テキストの選択
- ③輪読方式の採用

6、「二宮尊徳」小史

7、『二宮翁夜話』はどんな本か

8、はじめて『二宮翁夜話』を読んで驚いた

9、レポートの提出とアフターケア

- ①彼らが感銘を受けた章
- ②レポートのアフターケア
- ③学生のレポートを例示する

10、むすび

1、はじめに

① 国家財政戦略と「尊徳仕法」

この夏の衆議院選挙で民主党が圧勝し、民主党政権が誕生した。

この歴史的転換に際し、国民は新政権に大いなる期待を抱くと同時に、果たしてどこまでやれるかと危惧の念がないわけではない。

国民がひとしく懸念するのは、財政破綻国家の建て直しである。差し当たりの来年度予算で、税収見込みは40兆しか見込めないのに、予算規模は90兆を越すという。一家の家計に例えれば、年収400万なのに支出は倍以上の900万以上となる。にもかかわらず、新政権はマニフェスト優先で、子ども手当てと高校無償化などの支出増を既定路線としている。10月末の現時点で、予算の見直しと切込みに必死であるが、切羽つまって赤字国債発行やむなしとなりかねない。そのとき、危惧するのは「経済が回復し成長路線に乗れば国債の償還も可能である」とする論調である。

国民は、迫り来る少子高齢化時代を実感している。100年前の明治末期、日本の人口は約5000万人であった。100年間に倍以上に増えたが、あと2世代を経れば半数近くまで激減する。少子高齢化時代に経済成長が期待しにくいのも国民は知っている。

今までの自民党政権時代に、経済財政面についてその役割を担ってきたのは「経済財政諮問会議」である。昨年6月に示された、いわゆる「骨太方針」を振り返ってみよう。

冒頭に「我が国の経済と社会は、これまで培ってきた「豊かさ」と「希望」と「信頼」とを次代に引き継げるか否かの歴史的正念場にある」と述べている。

私たちには、前の世代より受け継いだ「よき伝統」を、次の世代に引き継ぐ歴史的責任がある。それを私は「世代責任」という言い方をしているが、我々はその「世代責任」を果しているであろうかと、常に自問し機会あるごとに話題にしている。

骨太方針は、ただ「～次代に引き継げるか否かの歴史的な正念場にある～」と、他人事みみたいな表現で、なんとも素っ気ない。責任という太字があるが、中味は「短期は大胆、中期は責任」との観点から、財政の健全化を推進する。つまり2006年に掲げた「2011年の基礎的財政収支（プライマリーバランス）の黒字化目標」が放棄され、「今後10年以内」に目標を先延ばしする。2017年までに、消費税率を12%まで段階的に引き上げる、その試算が掲載されているのみである。断固としてやりぬく気迫が感じられず、国民への説得どころか、期待した「世代の責任」に触れるような文言は見当たらない。

新しい民主党政権が、果たしてどういう国家財政戦略を打ち出すか見守りたい。

二宮尊徳翁は、私が私淑している心の師である。

今、もし二宮尊徳翁が居られたら、日本の経済社会の危機をどう認識され、どのような危機克服の手立てをお考えだろうか。二宮翁が財政破綻した藩や村の再建に、いわゆる「尊徳仕法」で直接間接にかかわった数は600余に及ぶ。いま国家財政の危機にあつて、尊徳仕法を学ぶことは無意味ではない。財政危機克服に「尊徳仕法」が参考になると思う。ただし、その前提に「心田の開発」という課題がある。改めて二宮翁の「尊徳仕法」を振り返るとともに、前提となる「心田開発」に学びたい。

二宮尊徳翁の生きた時代（1787～1856）は、今の世に酷似している。

翁は、天明7年（1787）に生まれ、安政3年（1856）に齢70歳で没している。徳川幕府250年の後半期であり、没後12年で明治維新となるが、この時代は幕末の低成長期で人口もほとんど増えていない。

すなわち、徳川家康が、慶長8年（1603）に江戸に幕府を開いたときの日本人の人口は、1200万人程度であった。それが、戦国の世も終り社会が安定したことから田畑の開発が進み、人口も増えて江戸は百万都市にまで成長するのである。元禄時代までの100年間は、天明の大飢饉や安政の大地震などの災害や飢饉が度重なり、人口も増えなかった。穀物の収納も一向に増えず、藩の財政は逼迫して、武士への扶持米支給も滞った。しかし、活発化した消費経済の流れはやまず、結果として民百姓も武士も借金暮らし、各藩は高度成長で蓄財した豪商から多額の借金を余儀なくされていた。まさに、現今のわが国の政府が国民から国債という名目で借金している現状そっくりである。

「入るを計って出るを制する」は、経世済民の原則である。

二宮翁は「分度」を発明した。分度とは分限に応じた度合のことである。家計にあつては、収入に応じた支出であり、企業においては赤字を出さないことである。分度が過ぎれば家計は破産して、家族は路頭に迷い生活保護を受けるほかない。企業は再生法に頼るか解散するしかない。国家の収支償わさるばあいはどうなるか。

財政破綻とは何か。いうまでもなく「日本国の経営破綻」である。破綻への論理は「まず費用ありき」である。そして「費用を賄う収入が足りなければ借金すればよい」となる。

借金の道は開かれている。ただし、必ず「返済する」が絶対要件である。確実に履行されなければ、サラ金地獄にはまるか、企業倒産となる。だから一家は貯蓄を心がけ、企業経営者は財務基盤の確立に心がける。ところが、なぜか一国の経営はこの厳しさに欠ける。

いまは昔、赤字国債の発行に皆が神経質だったころ、ある経済学者が、こういった。

「国債は、国が国民の金を借りるのだから、主人が奥さんから借りるようなものだ」と。尻馬に乗った輩が「一方で利子を払っており、国債を買った人の所得になっているから問題はない」との理屈をつけた。理屈はその通り。しかし、それは一片の理屈でしかない。結果はどうか。財政硬直化など、さまざまの歪が生じ未曾有の経済危機に直面している。理屈さえ立てば、学者や評論家はそれでよいかもしれない。上述の「国債は家内からの借金」論者は、その後大学教授となり、サイドビジネスでも儲けているらしい。だが、彼らは決して結果に責任を負わない。

二宮翁は、口舌の徒を忌み嫌った。翁の哲学は「知行合一」である。これを「知って、のちに行う」すなわち「先知後行」と解する向きがあるが、それは違う。王陽明は、知るは行いの始めであり、行いは知ることが成ったもので、これは一つであるという。翁のばあいも単に大脳皮質にとどまる知識は、無意味で「知らない」に等しい。知識は「実行」されてはじめて「知る」になる。実践を伴わない知識＝理屈は何の価値もない。

財政再建は、どんなに理屈をこねても「出る、を制する」以外にない。税収を増やす、すなわち「入る、をはかる」ために財政投融资をやり、生産増でパイを大きくする、いわゆるケインズ政策等も選択肢の一つではある。しかし、そうなったとしても、二宮翁のいう「分度」を定め、出口をきちんと制御しなければ、垂れ流しである。この分度がなかなか決まらない。分度は出口を防がねばならないので、行政改革は必然である。ところが、既得権益にしがみつ়政治家と官僚が猛反対する。

財政再建は、50年掛かろうが100年掛かろうが取り組まねばならない。190年前に二宮翁が「尊徳仕法」としてそのやり方を確立している。まさに国家百年の大計である。再建に時間がかかるのは仕方が

ない。

いま一つ、二宮翁のいう「心田の開発」を急がねばならない。

最近の憂うべきは、日本人のあまりにも「公に寄ってたかる依頼心」の肥大である。アメリカの建国の合言葉に「我々は、国家に対して何ができるか」を常に問う、があるという。およそ地域社会や国家を形成しその恩恵に浴しようとする者は、地域や国家に果たすべき義務があるのは当然である。

二宮哲学の根底は「至誠」である。そして「勤勉」と「儉約」と「推譲」を説かれる。

われわれは、地域社会や国家を離れて生きてはゆけない。二宮翁は、まず、わが身の暮らしをよくするために「勤勉」に働く。そして暮らしに「分度」を立てる。分度を守り「儉約」を心がけて暮らしした余りを「推譲」する。後日や来年のために、また災害に備えて蓄えるのを「自譲」というが、それだけに止まらず、周りの人々に、そして広く村落に、さらに国に推譲していく。すなわち「他譲」である。

そうは言っても、人々の心がその境地に至らねば何にもならない。ときは幕末の封建時代。苛酷な圧政に苦しみ、生きる希望を失えば、人々は自暴自棄になる。困苦に耐える心、勤勉に働く心を無くし、少しのものを奪い合い、博打にふけるような風潮がはびこる。翁が桜町の復興に赴いたときの人心は、まさにそのような状況にあった。

夜話（五九）に「我が道は、人々の心の荒蕪を開くを本意とす、心の荒蕪一人開く時は、土地の荒蕪は何万町あるも憂ふるにたらざるが故なり」とある。

桜町では、まず暁に出て一軒一軒を訪ねて、暮らしの実態を見聞きする。そして、雨漏りの茅葺屋根を葺き替え、壊れた家屋を修理し、便所を改修するなど。いわゆる「回村」の行を徹底して、人々の「心田の開発」に努めた。後になって、翁は他から「報徳仕法」の施行を依頼されても、その地の人々の「心田の開発」がなされていなければ、「天機未だ至らず」として動かなかった。

政治の貧困は、帰するところ民の心の貧困の反映である。国政レベルに、すぐれた指導者の出現を期待しつつも、われわれは手の届くコミュニティーや職場で、自分自身がリーダーシップを発揮し、またよりすぐれたリーダーを育てていく努力が肝要である。すなわち「一燈照隅」である。そのためにも、自ら「心田の開発」に取り組まねばならない。まずは『大学』八条目後段の「修身・齐家・治国・平天下」に習い、一人ひとりが「修身」に心がけることから始まる。

② 「二宮尊徳に学ぶ」を講ずる

昨秋、稲盛アカデミーの開講に携わっていた神田嘉延教授（当時は教育学部）から話があり、この4月から「二宮尊徳に学ぶ」を講義することになった。いきさつは、私が学生時代に二宮尊徳に魅せられて以来、永年農協運動に携わってきたこと。今なお、報徳思想に基づく『伝兵衛愛農塾』を創設して塾長をやっており、月刊「塾報」に「二宮尊徳に学ぶ」を連載しているなど、それらを神田教授はご存知だったのである。

稲盛アカデミーは、学生に人間教育を行う場として設けられた。創始者稲盛和夫さんの著書を読めば読むほど、二宮翁の「心田の開発」に通ずるところが多い。

私は、稲盛さんとは同郷で同世代に育ち、稲盛さんは鹿大工学部、私は同農学部的前身・農林専門学校の出身である。ともに戦前・戦中教育を受け、戦争に明け暮れて敗戦となり、混乱の中で戦後教育にもまみえるという、きわめて珍しい体験をした世代である。したがって、日本のリーダーとして活躍さ

れる稲盛さんは、はるかに遠い存在であるが、ひととき親近感を持つ一人である。今回「稲盛アカデミー」で「二宮尊徳に学ぶ」を講ずるご縁を頂いたことに感慨を禁じえない。講義の随所で、稲盛さんの教えを引用しようと思う。

さて、講義をどう進めるか。

大学における二宮尊徳の講義の事例を探したが、寡聞にして見つからない。自前でやらざるを得ないので、2～3の学生に「二宮尊徳を知っているか」と聞いてみた。ところが、ほとんど知らないという。しからは「今、なぜ二宮尊徳か」から始めねばならない。

したがって、本稿では、まず学生に語った序章「今、なぜ二宮尊徳か」を述べる。

次いで、私が二宮尊徳とどうして出会ったか。さらに報徳思想にもとづく『伝兵衛愛農塾』のことに触れたい。その上で、講義をどう設計したか。どんな進め方をしたか。その結果はどうであったか、などについて述べることにしたい。

なお、アカデミーの専任教官方から「人間学だから、できるだけ体験を語ってほしい」とのご意見があった。そこで、テキストを読み進む中で、自らの体験をも語ることにした。

2、今、なぜ二宮尊徳か

昔の人、徳川末期の封建制時代の二宮尊徳が、今なぜ登場するのか。

かつて、全国各小学校の校庭にあった銅像や石像が、敗戦後に撤去されて久しく、若者にはほとんど無縁の存在なのに……。なぜ？

講義に入る前に、二宮尊徳に不案内な学生に次のことを紹介しておきたい。

① 内村鑑三の『代表的日本人』に登場する二宮尊徳

アメリカの大学の書店には、日本のことを学ぶ本として、何れも英文で書かれた3点セットがあるという。

一つが、『Representative Men Japan』（1908刊）

『代表的日本人』内村鑑三(1861～1930)著

二つが、『Bushido The Soul of Japan』（1900刊）

『武士道』新渡戸稲造(1862～1933)著

三つが、『The Book of Tea』（1906刊）

『茶の本』岡倉天心(1863～1913)著

内村鑑三、新渡戸稲造、岡倉天心の3人が、明治の日清・日露戦争のあとのこの時期に、相次いで外国人向けに英文の著書を出している。

どうしてか。

世界中の人々が、アジアの小国・日本が、清国との戦争に勝ち、大国ロシアに勝ったことにびっくりした。いったい「日本人とはどういう民族か」との関心が寄せられ、さまざまの情報が流されていた。

内村鑑三と新渡戸稲造は、クラーク博士の『Boys, Be ambitious』＝少年よ、大志を抱け＝で有名な北海道大学の1期生と2期生であり、ともにキリスト教に入信し、アメリカにも留学したクリスチャンである。岡倉天心は、東京開成所（のちの東京大学）に学び、英語が得意だったことから同校講師のアーネスト・フェノロサの助手を務めるなどして、のちにわが国屈指の美術家・美術史家・教育者となった。彼らも、外国人から「日本人とは？」と聞かれたことであろう。その問いの中には、彼らの無理解やまた誤った情報もあった。そこで、日本を正しく理解してもらうために外人向けに書かれたのが

これらの本である。

この3点セットの『代表的日本人』の一人に、二宮尊徳が挙げられている。

内村鑑三が、日本を正しく知ってもらうために取り上げた人物は、西郷隆盛、上杉鷹山、二宮尊徳、中江藤樹、日蓮上人の5人である。

この5人を、次のように表現している。

西郷隆盛・・・新日本の創設者

上杉鷹山・・・封建領主

二宮尊徳・・・農民聖者

中江藤樹・・・村の先生

日蓮上人・・・仏僧

二宮尊徳は次のように紹介されている。

「19世紀のはじめ、日本の農業は、実に悲惨な状態にありました。200年の長期にわたって続いた泰平の世は、あらゆる階層を問わず人々の間に贅沢と散財の風をもたらしました。怠惰な心が生じ、その直接の被害を受けたのは耕地でありました。多くの地方で土地から上がる収入は3分の2に減りました。かつて実り豊かであった土地には、アザミとイバラがはびこりました。耕地として残された、わずかな土地でもって、課せられた税のすべてをまかなわなければなりません。どの村にもひどい荒廃が見られるようになりました。正直に働くことのわずらわしくなった人々は、身を持ち崩すようになりました。慈愛に富む大地に豊かな恵みを求めようとはしなくなりました。代わって、望みのない生活を維持するため、相互にごまかしあい、だましあって、わずかの必需品を得ようとなりました。諸悪の根源はすべて道徳にありました。「自然」は、その恥ずべき子供たちには報酬を与えず、ありとあらゆる災害を引き起こして、地におよぼしました。そのとき、「自然」の法と精神を同じくする、一人の人物が生れたのです」

その人物が、農民聖者「二宮尊徳」です……と。

② GHQ（アメリカの占領軍総司令部）が高く評価した「二宮尊徳」

戦前は、全国どこでも小学校の校庭に二宮金次郎の像が置かれていた。薪を背負い、歩きながら本を読む姿＝負薪読書の像＝である。それが敗戦後、校庭から消えてしまった。進駐軍のせいだと信じている人がいるが、そうではなく、「軍国少年の鑑」とされた金次郎の像を撤去せよ！という左翼プロパガンダにはまった教職員の手によるものであった。それを進駐軍＝GHQ（General Head Quarter＝アメリカ極東軍総司令部）の意思でもあると宣伝したことが、誤り伝えられたのである。

事実は全く違う。GHQは、日本に民主主義をいかにして定着させるかを探る中で二宮尊徳の存在を知り、農民同士で合議する「芋こじ」や、農民の投票による善行表彰など、まさに民主主義そのものであることに気付いた。二宮尊徳を排斥するどころか、封建時代に民主主義の先達として活躍した人として高く評価し、日本人は新しい民主主義国家の建設のために、二宮尊徳を再評価すべきだと言っている。具体的な事例を見てみよう。

（その1）

戦後の日本の思想的支柱を「二宮尊徳思想」としたGHQは、占領の翌年1946年（昭和21年）に発行された日本銀行券壹円札の肖像画に、二宮尊徳を用いることを認めた。

それ以前の一円札の肖像画は、武内宿禰（たけのうちすくね＝大和朝廷の初期に活躍したという記紀伝承上の人物）であったが、軍人支配の体制一新のために、他の紙幣の肖像画とともにすべて廃止され、

GHQの了解のもとに新しく作り変えられた。

(その2)

GHQの新聞課長インボーデン少佐 (Major Daniel C Inboden) は、昭和24年10月、日本青年館発行『青年』誌上に「二宮尊徳を語る＝新生日本は尊徳の再認識を必要とする」を公表した。その中に次のような記述がある。

「もしあなた方が熱心に真理を求める人であるなら、いやしくも真理に関しては、新しいとか、流行外れだとかいうことはない。真理というものは時代を超越して、つねに、しかも永遠に、生々とした力をもっていることを知るだろう」

「尊徳の事業は、その精神において深遠なものであったが、【武士に非ずんば人に非ず】の封建時代に、農夫に生まれ農夫として立ったため、後で大小の藩から財政立て直しの顧問や、指導者として起用されたが、その手腕を大きく振るったとはいえない。しかし、彼の人格と意志は全国日本人の間にまだ残っているはずである。彼が数ヶ町村、あるいは2～3の藩の復興に試みた方法を、今日拡大発展させ、あなた方の祖国日本再建のため用いることは、あなた方の義務であると同時に権利でもあろう。……尊徳二宮金次郎こそは、日本において再認識さるべき第一の偉人であると私は考える」

そして、尊徳に次のような賛辞を贈っている。

「近世日本の生んだ最大の民主主義者」、「世界の民主主義の英雄、偉人」の一人、「世界最初の信用組合の創設者」、「日本の現状において再認識さるべき第一の偉人」と。

(二宮尊徳思想論叢Ⅲより)

思うに、占領政策の基本原則の一つReform＝改革、重点政策の一つDemocratization＝民主化を推進する。すなわち民主主義国家として再生させる。その手本となるべき人物が日本人の中に居るではないか。それは「二宮尊徳」だと認識していたわけである。

(注)

GHQの日本国占領政策 (頭文字をとって、3R5D3S政策という)

◇基本原則 (3R)

Revenge	復讐
Reform	改革
Revival	復興

◇重点政策 (5D)

Disarmament	武装解除
Demilitarization	非武装化
Deindustrialization	産業空洞化
Decentralization	分散化
Democratization	民主化

◇補助政策 (3S)

Sport	スポーツ
Sex	セックス
Screen	スクリーン

すなわち

- ①心身を鍛える「武道」を禁じて、娯楽性のあるスポーツに変える。
- ②特攻精神を育む禁欲主義を排除するために、セックス開放を推進する。
- ③それらを、日本人の脳裏に刻み込むためにスクリーン (映画) を用いる。

③ 「偽」の横行する日本＝心田の開発を説く二宮尊徳

年末に「今年一年を振り返り、一字で現すとすればどんな字か」が話題となり、一昨年は『偽』が選ばれた。全くそのとおりで、商品の偽表示、偽装事件は連日マスコミをにぎわせた。「偽」とは何か。辞書には「いつわり」＝人間の作為、うわべのつくろい＝とある。

私ども日本民族は、古来「偽」は人道に悖る行為として厳しく排除してきた。

後漢書にも「政治の要諦は先ず四患を取り除くこと。一に曰く、偽。二に曰く、私。三に曰く、放。四に曰く、奢」とある。すなわち第一に偽、つまりうそ・いつわりを無くせよと述べている。偽のあるところに、決して「信」はありえない。

儒教には、人の常を守るべき道徳として五常の教えがある。五常とは、仁・義・礼・智・信の五つである。この「信」は「真」なければ成り立たない。真の反対が偽である。

二宮尊徳は、過酷な租税で貧窮に陥り、重なる災害で飢えに苦しむ農民たちが、わずかなモノとカネをめぐる争奪に明け暮れるようになれば、その心には、仁なく、義なく、礼なく、ましてや互いに信じ合う心などなくなる。したがって、まずは「**心田の開発**」が大事であり、それが最重要だと説いている。

『大学』の一節に「所謂其の意を誠にすとは、自ら欺くなきなり」とあるが、「其の意を誠にす」とは、自分が自分を欺かないことだという。それが「真」であり、嘘偽りのない心であるから、他人の「信」を得るのである。自己弁護して自分を庇ってしまうところに「偽」が発生する。自分を欺いて、なんで他人の「信」が得られようか。

翁は、道路や水路ひとつを造るにしても、周辺の人々の心が正常でなければ、維持改修も出来ない。目に見える道路や水路の開設も、まず周りの人々の心の正常化、うそ・いつわりのない、「心田の開発」ができなければ無意味だとして、そのことに心がけた。桜町の復興に赴いたとき、未明に起きて1軒1軒を訪ね歩いて、話を聞き、屋敷を検分し、家屋の普請状態を見て、必要な修理を勧めるなど、暗くなってから帰るといふ「回村」を徹底して行った。冷やかにみていた村人たちの目が、次第に信頼と尊敬に変わってくると、いつしか争いの声も少なくなり博打の場も消えていく。ひたすら「至誠」と「実行」で、村人たちの「心田の開発」がなされてゆくのである。

3、私と『二宮尊徳翁』との出会い

私の生まれは、薩摩半島の真ん中あたりに位地する辺鄙な小集落である。祖父市次郎が明治の後期、家督を弟に譲り、半里（2km）ほど離れた山野に「鋤下年季」を利用して開拓を始めた。希望者を募って移り住ませ、共に開墾に励み10数町歩が得られた。区割りして名付けをし、それを「鋤下年季」として届け出たようである。自らの宅地を一町歩（約1ha）としたので近隣で評判となり、人々は祖父を「一町堀の市次郎」と呼んだ。私も幼いときから「一町堀の正則」と呼ばれ、兄姉たちも皆それで通用した。余談だが、今でも生家の隣に土手に囲まれた1段高い1町歩の畔なし畑がある。ところが、私が生れてまもなく、建築事業に手を出していた父が、昭和の大不況に見舞われ倒産の憂き目にあった。多くの畑地山林は人手に渡り、食ってゆけるだけの小農に転落したのである。

(注)

鋤下年季＝江戸時代、新しい田地の開墾当初から村高に登録されるまでの期間。普通3～5年の間は租税が大幅に減免された。明治17年の地租改正で、開墾後、地目変更までの一定期間。

小学校までの距離が1里。集落わずか5軒で同級生はいない。登校のときは連れがいても帰りは一人である。おかげで本が読めた。図書室の本は読みつくし、先生や友達の家の本借りに行った。田舎道を

一人で本を読みながら歩くので「二宮金次郎みたい」といって噂になった。成績はトップだったが、貧しいので中学校には行けなかった。校庭にある二宮金次郎の銅像の前で、唱歌「二宮金次郎」を口ずさみ、貧乏なんかには負けてたまるものかと、子供心に誓った覚えがある。それが「二宮金次郎」を意識したはじめである。

そして、兄二人がともに海軍に入ったことから、家業を継ぐべく加世田農学校（現加世田常潤高校）に進んだ。ところが、終戦で兄が帰郷して家を継ぐことになり、私は自由の身になった。そこで、も一つ上の学校に行くことを希望して幸いに鹿児島農林専門学校に進学できた。終戦後の混乱の中で皆が食うのに困る時代であった。

こうして私は、ここ鹿児島大学農学部の前身、鹿児島農林専門学校農学科で学んだ。学業後半ともなれば、卒業論文のテーマを考えねばならない。関連して、将来どんな道を歩もうか、どこに就職しようかと、いろいろ考えての結論は、農業協同組合運動に生きようということになった。

ときの校長は、協同組合学者として著名な三浦虎六先生である。

卒業論文のテーマを協同組合にしようと思い、農業経済担当の服部教授に相談し、教えを請うべく校長室を訪ねた。そのころの三浦校長は、戦災でほとんど壊滅した学校施設の復旧と、新学制による大学への改変など多忙極まりない激務にあった。

そのような状況であったが、私が協同組合運動の道を歩みたいと申し出たことをたいへん喜んでくださって、以後格別のご指導に与ることになった。

まずは、読むべき本の選択である。「今、老農関係の本を読んでおります」と申し上げたら「それは結構だ。とくに二宮尊徳は念を入れて読めよ」とおっしゃった。その後のある日、仮住まいの校長住宅「あらた同窓会館」に伺ったとき、こう話された。

「尊徳はネ。君の年ごろに観音様に会ったのだよ。そこのところ読んだかい」

「ひと通り読んだだけです」と申し上げたら、「肝腎のところだから、よく読んでおき給え」といわれた言葉が、今も耳に残っている。

これが、少年金次郎ではない「二宮尊徳翁」と私との出会いである。

こうして、三浦虎六先生の導きで協同組合運動に目覚め、卒業して鹿児島県農協連に就職して約40年、最後は役員を務めた。在職中、そして退任後の人生を顧みるとき、まさに山あり谷ありの半生であったが、その節目に「二宮尊徳に学ぶ」ことが多かった。

4、報徳思想に立つ『伝兵衛愛農塾』

① 『伝兵衛愛農塾』の創設

数年前、某焼酎醸造会社の社長に、原料さつまいもの生産に取り組む農業法人の設立を勧めたところ、賛同して設立された。引き続き応援を求められたので、かねて念願の私塾を付設してもらって塾長に就任した。塾の名称『伝兵衛愛農塾』は、焼酎会社の創業者初代「伝兵衛」にあやかった。因みに現社長は5代目伝兵衛である。

『伝兵衛愛農塾』の信条は、報徳思想に則って次の三か条とした。

- 一つ、さつまいを育む大地の恵みに感謝します。
- 二つ、こんこんと湧く伏流水の恵みに感謝します。
- 三つ、黙々と働き続ける麹菌の恵みに感謝します。

「恵みに感謝する」は、尊徳の教える「報徳」すなわち「徳に報いる」心である。

古来、薩摩半島一帯は、水田が少なく畑は火山灰土壌で、作物の出来はあまりよくないところである。しかし、さつま芋だけはよく育った。そして八重山山系に降り注いだ雨は美味しい伏流水となり、市来・串木野一帯にこんこんと湧き出ていた。ここに住む先人たちは、畑の徳＝大地の恵むさつま芋と、海の徳＝吹上浜の魚介類を主食とし、山の徳＝伏流水を飲んで命をつないできた。その中から開闢の先覚者たちによって焼酎文化が生まれた。すなわち、さつま芋と伏流水を生かし、発酵技術を取り入れて人々に好まれる焼酎づくりの誕生である。そのことに思いを致し『伝兵衛愛農塾』は、さつま芋づくりで大地の恵みを学び、仕込み体験によって、伏流水の有難さと目に見えぬ麹菌の偉大な働きを感得する場と位置づけた。

さらに、塾で伝統文化を学び、芋づくりや仕込み体験で快い汗を流したあとの「だいやめ」(ダレヤメともいう。ダレは疲れのこと、ヤメは止め・癒す意)も大切な焼酎文化の一つである。したがって塾では、焼酎を飲んで疲れを癒し会話を楽しむ場＝『伝兵衛だいやめ会』を開催し、地域の人々にも開放することにした。地域の人々の温かい「まなざし」に見守られ、直接また間接にお世話になっていることへのささやかな恩返し＝推譲である。

塾生は20人程度とし、直営農場は3h a 余り、幼稚園や小中学校、近くの農芸高校と提携して食農教育実践の場とし、一部は生協や企業の契約農場とした。

② 塾報に『二宮尊徳に学ぶ』の連載を始める

塾では「農の聖人・二宮尊徳翁」の教えを学ぶのを柱にした。具体的には「二宮翁夜話」を拾い読みしながら解説を加えていくのである。それを毎月発行する『伝兵衛愛農塾』塾報のA4版1ページに、塾長講話として連載することとした。

なお、塾報には塾の行事や農場の現況などが、写真も交えて掲載されるので、PRの意味もあって、塾生以外にも広く関係先へ配布された。

神田教授は、これらのことをご存知だったのである。

塾報第1号の「塾長講話」を提示する。

.....

『伝兵衛愛農塾』塾報第1号(平成19年5月1日)

塾長講話

「いま、なぜ二宮尊徳か」(1)

「経済を忘れた道徳は寝言である。道徳を忘れた経済は罪悪である」(二宮翁の教え)

日本は明治以来、欧米の合理主義の導入に励み、いまや世界第二の経済大国にまで発展しました。しかし、合理主義経済への偏りが「大量生産、大量消費、大量廃棄」を生み「モラルよりモノとカネ」を優先させることになって、多くの問題を噴出させることになりました。資源の浪費、環境破壊、食料自給率の低下、家庭の崩壊、少年非行の続発、コミュニティーの衰退、企業の犯罪等々、いずれも根源に「道徳」＝モラルの欠如があります。

世界各国から尊敬された日本の「恥を知る文化」は、いったいどこへ行ったのでしょうか。今ようやく

「道徳教育」の軽視を反省した、新しい教育基本法が成立するようです。

最近、たいへん面白い「道徳という土なくして『経済』の花は咲かず」＝日下公人著＝という本が出ました。はじめに、こうあります。

「歴史をひも解くと、帝政ローマ、大英帝国などあらゆる覇権国家の衰退・滅亡の原因には「道徳の低下」があった。為政者や国民の道徳水準が低下すると、国内は混乱し経済は低迷する。逆に道徳が普及・徹底すると、国民相互が信頼し合う社会になるため、効率よく経済が発展を遂げて国力が高まる。これまでは「数字」による経済指標ばかりが注目されてきたが、今世紀は「道徳」から経済を見ていくことが重要になる」と。

150余年も昔の人、二宮尊徳の教えを「二宮翁夜話」に編纂された高弟・福住正兄氏は、著書の「あとかぎ」に次のように述べています。

「報徳学は実行学である。だから普通の学問とちがい、実徳を尊んで実理を究明し、実地に施して実行し、天地造化の功德に報ずる勤めをして、そこに安心立命の境地を得る教である。その天地に報ずる勤めは、内に天賦の良心を養成することと、外に天地の化育を賛成することの二つである。まとめて一口にいえば、道徳と経済である。だから、道徳をもって体とし、経済をもって用とし、この二つを至誠の一つで貫くのを道とする……、云々」

ヨーロッパで、まだ「エコノミー」＝日本語で経済と訳された＝の学問が発達しない前に、「道徳を忘れた経済は罪悪である」と警告を発しているのです。すごいですね。

も一つ「二宮翁夜話」に学びましょう。

(二宮翁夜話・天の巻三六)

「神儒佛正味一粒丸」のはなし

翁が言うには、私は長い間考えて、神道は何が教えの本で、どんな長所がありどんな短所があるのか、儒教は何を教えの本とし、どんな長所と短所があるのか、仏教は何を教えの本とし、どんな長所と短所があるのか、いろいろ比較検討してみたが、それぞれ長短があつて大差はない……。そこで、神儒佛の各教の主とするところは何かと考えてみると、

神道は開国＝神ながらの道である

儒教は治国＝国家統治の道である

仏教は治心＝自己修養の道である

だから私は、この三道の正味だけをとって一つの教にまとめた。それが私の「報徳教」である。戯れにこれを名づけて『神儒佛正味一粒丸』という……云々。

弟子の一人・衣笠兵大夫が、その三つの混合割合はと問うたら、神道一さじ、儒教・仏教が半さじずつ、とおっしゃった。傍らの人が、紙に○の半分と四半分二つを一つの輪に書いて出したら翁が笑って、丸薬というのは、よく混和して元が何であったかわからないようにしなければならない。呵々……と。

【塾長のひと言】

日本は他の宗派を許さぬ一神教の国ではありません。神棚も十字架も仏壇も並存する平和な国なのです。(続きは塾報第2号へ)

続いて

塾報第2号の塾長講話『二宮尊徳に学ぶ』(2)

(二宮翁夜話二)

「天道の中にあつて人道を立てる」

塾報第3号の塾長講話『二宮尊徳に学ぶ』(3)

(二宮翁夜話一)

「誠の道は書籍でなく天地の経文に学べ」

塾報第4号の塾長講話『二宮尊徳に学ぶ』(4)

(二宮翁夜話十三)

「文字は道を伝える道具である」

以下、塾報(5)(6)～と、夜話の拾い読みが続いていく。

.....

5、講義どう設計したか

今回、稲盛和夫名誉アカデミー長の「若者に人間力の涵養を」という熱い思いに、ご縁を頂いて、改めて二宮翁の事跡の探索や本読みに励んだ。2月には小田原の「報徳博物館」や栢山に保存されている生家を訪ねて、洪水をもたらした足柄の山系を眺め、田畑の残る周辺を歩き回ったりして、翁の金次郎時代を偲び感慨を新たにした。

また、尊徳関連の古本探しでは、いくつかの稀書にもめぐり合った。とくに恩師三浦先生・旧姓高須虎六著『二宮尊徳の思想と業績』(昭和11年・高陽書院発行)が手に入ったのは嬉しかった。60年前には、戦災の混乱で先生も手持ちが一冊しかなく分けてもらえず、鹿大図書館にもない本である。それが宇都宮の古書店にあった。おそらく先生の宇都宮高農時代の教え子の蔵書だったのであろう。布張りの装丁は古びて、背面の高須虎六著の金文字はかすれて定かには読めない。恩師の格調高い文章に改めて魅入られた。

① 講座名について

当初、講座名を「二宮尊徳論」としてあった。だが「論」となれば、翁に関する著書・文献をいくらかは読んではいらるものの、肝腎の翁が金次郎時代に読まれた四書五経は、ほんの一部しか読んでいない。孫引きに頼らざるを得ない尊徳論では恥ずかしい。また二宮尊徳に不案内な学生たちに、いきなり「論」はそぐわない。私も共に学ぶので「二宮尊徳に学ぶ」に変更してもらった。

② テキストの選択

テキストの選択には迷った。二宮尊徳に関する本は多い。

もともと二宮翁は、自分の教えを書き残すことをしなかった。だから弟子たちが、今でいうメモをとることも禁じた。そもそも「わが道は言行合一だから書き残すことはない」といい、まるで「書く時間があるなら実行せよ」と言わんばかりである。

したがって、二宮翁の伝記ものの元になったのは、いずれも翁の没後に弟子たちが「如是我聞＝吾はこのように聞いた」をとりまとめ、明治になってから公刊されたものである。

そのうち、次の三つが著名である。

『報徳記』.....富田高慶(たかよし)

『二宮翁夜話』・・・福住正兄（まさえ）

『二宮先生語録』・・・斉藤高行（たかゆき）

「現代版報徳全書」を編纂された佐々井信太郎氏は、二宮先生の伝記として第一は『報徳記』であると述べておられる。二宮翁の最高弟で学識ともにすぐれた富田高慶翁が、二宮翁に師事し、功業に随従した実践録である。また『二宮先生語録』も報徳思想の普及に尽くされた斉藤高行翁の著書だけに評価が高い。いずれでもよかったが、講義に輪読方式を取り入れたことから、学生には『二宮翁夜話』がよいと結論づけた。そして、読みやすい「報徳全書」の佐々井典比古訳注『二宮翁夜話』（上・下）を用いることにした。

③ 輪読方式の採用

私が学生に教えるのではない。学生は「二宮尊徳に学ぶ」のである。教壇で私が夜話を読んで解説してゆくのかなと思ったが、しっくりこない。思案の結果、人間学講座は自然科学の講座とは違う。テキストを読んで触発されたら、直ちに自省し、即実践しなければ意味がない。それには、輪読方式がもっともよいと思った。

昔の人たちの勉学は、まず四書五経の素読から入る。漢文を「読書百遍意自ら通ず」というように、繰り返し読むのである。読書の仕方には、黙読、通読、濫読、味読、熟読などいろいろあるが、昔は「読書三到」がいわれた。すなわち、口でよく読む「口到」、目でよく読む「眼到」、そして心でよく読む「心到」の三つである。

子供のころ、学舎（薩摩藩における郷中教育の場）で年長者から、教科書を大きな声を出せと言われて読まされた。すなわち自分の眼で見て、自分の声で読み、自分の耳で聴くのである。目・口・耳を動員するから、身につくのだと教えられた。

輪読の効用は多々あるが、わけても読んで聞かせる間は、自分が一座の主人公である。誰かが読むのを聞くだけではない。自分の番がいつ回ってくるかと緊張する。間違いなく読もうと思えば、他人の読みにも耳をそば立たせる。自然と、読む人の「口読」に波長が合い意識が集中する。一人が感動すれば、輪読仲間に共感の輪が広がりやすい。

「二宮尊徳に学ぶ」講座は、根本をなす至誠観、正義感、倫理観、人生哲学など「人間力」の形成に資するためにある。したがって、単に大脳皮質の記憶に止まる知識の習得だけであってはならない。二宮翁夜話の話に感動したら、自省自得し、自分を変革する志を立てて、即実践に移すことが大切である。立志によって、身近な日常生活の些細なことの変革がはじまり、それが継続されれば習慣化する。積小為大で人間が変わる。

夜話を1章読むごとに、学生の何かが変わる。

【感動・立志で人間が変わる】

感動すれば 立志が生ずる
志を立てれば 心が変わる
心が変われば 態度が変わる
態度が変われば 習慣が変わる
習慣が変われば 人格が変わる
人格が変われば 人間が変わる
だから 人間は変わる

輪読を始める前に、次のことを注意する。

一つ、ゆっくり読むこと。

二つ、皆によく聞こえるように読むこと。

三つ、読みづらい字は、すぐ問うこと。

はじめは、戸惑う学生が多い。輪読なんてやったことがないという。だから、早口で読む者、自分だけに聞こえるボソボソ声、誤読など様々だが、その都度「もっと、ゆっくり」とか「声が小さい」とか、また「語尾をはっきり」など、即座にきちんと指摘すれば、すぐによく読むようになる。また会話するときは、常に相手によくわかるように、よく聞き取れるように、発音を明瞭に心がけることを教える。

輪読に慣れてきた学生たちの感想文によれば、輪読は好評である。

6、「二宮尊徳」の小史

二宮尊徳がどんな人か、その生涯は？ いずれ講義過程でわかることだが、ここでは輪読に入る前に、翁の輪郭を知ってもらうだけの小史に止める。

翁の幼名は金次郎である。

1787年(天明7年)に、2町3反(約2, 3ha)の田畑を持つ、小田原近傍で栢山(かやま)の善人といわれた父母のもとに生まれ、幸せな幼児期を過ごしていた。ところが、4歳のときに近くの酒匂川が洪水で決壊し、田畑がほとんど土砂に流されて一家の不幸がはじまった。洪水の後の無理から、父が病に倒れて病死し、母もまた2年後に亡くなったことから、幼い二人の弟は母の里に預けられ、16歳の金次郎は本家筋の叔父万兵衛方に身を寄せて、ついに一家は離散してしまう。

金次郎はそれにもめげずに、昼は叔父の仕事を懸命に手伝い、夜は遅くまで父の残した儒教や仏教などの書物を読みふける。そのころは「百姓に学問は不要」といわれた時代である。叔父に灯油が減ると叱られると、友人から一握りの菜種を借りて荒地を耕して種を蒔き、1年後に150倍の菜種を収穫した。それを隣村で灯油に替えて、書物を読み続けるのである。また捨て苗を拾って空き地に植え付け、秋には1俵の稲モミを収穫した体験から「積小為大」の法則を発見し、自立への強い信念を抱くようになっていくのである。

19歳で叔父の家を出て、生家の廃屋を修理して独立した尊徳は、母の死後残された6反歩を元に、徐々に田畑を買い戻し、5年後に1町5反、31歳になった頃には、父の代をしのぐ3町8反の田畑を持つ地主になった。

その実績を買われて、家老服部家の財政建て直しを行い、藩主大久保忠真公の依頼で桜町(栃木県芳賀郡)の廃村復興を手がけ、役人たちの妨害に遭いながらも10年後に完成し、【野州聖人】と称えられことになる。その後、福島相馬藩の財政建て直し、幕府の求めに応じて日光領の財政建て直しなど、300余カ村に携わったが、1856年(安政3年)10月、明治維新の夜明け前に70年の生涯を閉じた。

(略譜)

1783(天明3) 浅間山大噴火一翌年より天明の飢饉はじまる。

1787(天明7) 栢山村に生れる

1791(寛政3) 5才のとき、酒匂川決壊一所有田の大半が流失

1797(寛政10) 12才 父利右衛門病む一2年後に死去

1802(享和2) 16才 母よし没する。大洪水一一家離散一叔父万兵衛方に寄食

1805(文化2) 19才 二宮七左衛門方に住み込む。余暇に廃田復旧

1806	(文化3)	20才	生家の近くに家を建てて住む。田地9畝余を買い戻す
1809	(文化6)	23才	田地26畝を買い戻す、翌年1町4反6畝となる
1811	(文化8)	25才	家老服部家の若党となる
1815	(文化12)	29才	服部家の借財償還計画をつくる
1817	(文化14)	31才	中島きのと結婚
1818	(文政1)	32才	服部家の家政整理引き受ける。藩主忠真公より表彰される
1819	(文政2)	33才	長男徳太郎が誕生し間もなく死亡、きのと離婚
1820	(文政3)	34才	岡田波子と結婚。斗楯の改良、藩士の五常講創設
1821	(文政4)	35才	桜町領の調査復命。嫡子弥太郎誕生。服部家第1回整理完了
1822	(文政5)	36才	藩に登用—(名主役格) 桜町領復興を命ぜられる
1823	(文政6)	37才	田畑・家財を処分し桜町に移転、復興事業始まる
1827	(文政10)	41才	領民の不平分子が騒ぐ、あとトラブル頻発
1829	(文政12)	43才	成田山で断食、帰任後に事業円滑化する
1831	(天保2)	45才	藩主に報告—「以德報徳」の賞詞あり
1833	(天保4)	47才	天保の飢饉はじまる。凶作を予知し対策を講ずる
1834	(天保5)	48才	徒士格に任ぜられる。三才報徳金毛録を著す
1835	(天保6)	49才	矢田部藩の財政再建
1836	(天保7)	50才	諸国凶作。烏山藩に救急援助など。桜町第2期事業決了
1837	(天保8)	51才	小田原藩の飢民救済。忠真公死去。烏山領復興事業着手
1838	(天保9)	52才	小田原領・下館領の復興事業着手 諸藩、諸家の復興に携わる
1842	(天保13)	56才	幕府に登用(御普請役格)、利根川分水路測量調査
1843	(天保14)	57才	小田原報徳社創立。尊徳を名乗る
1844	(弘化1)	58才	日光仕法雛形の作成受命。相馬藩の長期財政基本計画
1846	(弘化3)	60才	日光仕法雛形完成。小田原藩復興事業打ち切り
1848	(嘉永1)	62才	東郷陣屋に移転、事業着手認められず
1849	(嘉永2)	63才	事業ようやくはじまる
1852	(嘉永5)	66才	弥太郎(尊行)、文子結婚
1853	(嘉永6)	67才	日光領復興事業受命。江戸で発病。病を押して現地調査
1855	(安政2)	69才	函館奉行より開拓調査依頼 江戸大地震
1856	(安政3)	70才	御普請役に進む。10月20日没する 2年後に安政の大獄
1867	(慶応3)		大政奉還 (尊徳翁死後11年)
1868	(明治1)		官軍今市侵入、復興事業中止。戊辰戦争

7、『二宮翁夜話』とはどんな本か

テキストに用いる『二宮翁夜話』のことを概略申し述べておきたい。

『二宮翁夜話』の成り立ち

「二宮翁夜話」の「解題」に著者の経歴が述べられている。少々長いが引用する。

著者の福住正兄翁は、文政7年(1824)に相州大住郡片岡村(平塚市片岡)の名主大沢市左衛門の五男として生まれ、のちに福住家に入り家督を譲って正兄といった。

大沢家は代々の大名主で、資産と名望を有し、蔵書もあり、長兄小才太(精一)・次兄勇助も相当の才徳をもって聞えた。幼時から学習の機会に恵まれ、儒者について素読を学び、14歳の暮れにはすでに四書五経を終えた。また歌人原久胤を慕って和歌をも試みた。16歳から農業にも勤め、ことに18歳の1年間は下男と全く同様の刻苦精励もあえてしてみたが、多くの意義と希望を見出せなかった。そこで医者になって世の貧民を救おうと考えて、父に相談したところ、父は『真に世のためになろうとするなら、国を救う医者になるがよい。いま幸いに、国を医する大医二宮先生がおられる。入門して勉強したらいいだろう』と教えられ、ここに著者の一生が定まったのである……云々。

そして、二宮翁のところに入塾を希望するのですが、2回の訪問もかなわず、入門を許されたのは弘化2年(1845)で、著者22歳のとき、二宮先生は59歳。場所は江戸西久保に設けられた「仕法雛形編集所」だった。ところが、二宮塾には学課などはなく、はじめ当惑したが、やがて「ひそかに思考すること、この塾にあっては、先師の御行いを見てそれに習わんと心掛け、先師の御説話を承りてよく記憶すること、粗食粗衣と朝の早起きと、夜おそく寝るとの修行なり」(福住昔物語)と悟ってから、身をもって学ぶ修行に精進した。ために翌春には一時健康を害するほどであった……云々。

2年ほど経った弘化4年5月、二宮先生が日光仕法のために野州に転じて神宮寺に仮住まいされてから、翌嘉永元年の7月、東郷陣屋に移転されるまでの1年余が、著者にとって又とない修行随聞の場であったとして「予が幸福、諸門人中前後比類なき仕合せなりけり」と記されている。この間の著者の仕事は、先生の身の世話から、浄書・起草などに止まらず、巡回指導にはすべて随行し、いわゆる「実地正業」-仕法取扱いの実際も、分に応じ時に従って担当せしめられた。

嘉永3年、著者27歳のとき、入夫婚姻の話が持ち込まれ、先生も賛成されたので、遠縁にあたる箱根湯本の旅館福住家の入婿となったが、当時、福住家は衰運にあった。そこで著者は、二宮先生に学んだことを実践した。すなわち、夜が明けてから起きたことはないという勤勉さで、分度を確立し、正直と、安値と、貴賤の差別をつけぬ報徳式営業法に勤めたところ、好評は一時にあらわれて、翌4年には名主を命ぜられた。そこで旅館、かご人足、あんま、髪結いに至るまでよく説得して、掛値を禁止し、旅客が安心して湯本を利用できるよう、宿場規約を設け、これを励行させた。そして、安政3年には箱根14か村の取締役を命ぜられている。

その間に、何回も危機にあった。安政3年の大風害、同6年には洪水と大火、慶応3年に再び大火と一村一家に災厄が重なり、著者はこれらの救急に奔走しながらも、かねてから一村復興永安の仕法を「村柄取直し方」の名のもとにすすめ、ついにすこぶる顕著な成果を得た。村借2650余両を皆済した上、備荒積金560両と多量の積穀を備え、慶応元年には小田原藩より表彰され、苗字・脇差・袴着用を許されている。明治になってからも、大地獄・小地獄の名称を明治5年建白により大涌谷・小涌谷と改めたことや、近代的建築資材による防火構造の奨励など数多く、中でも、湯本山崎間の道路がすこぶる狭隘であったのを、明治8年、自己の負担において着工、迷信による反対が多かった白地蔵石を採掘してこれを完成したことは特筆すべき事跡だと評されている。

また著者は、小田原藩に学校の建設を建白したことから、藩は漢学・洋学・国学の藩校を組織し、著者は藩士に登用されて、君公・重役などの前で国学を講義することになった。さらに明治5年には、天皇皇后両陛下が箱根行幸の際、福住邸に少憩されている。

著者福住正兄の著作には「富国捷徑」や「報徳学内記」など数多いが、最大の著作は「二宮翁夜話」

である。

二宮翁の膝下で教えられた教説の手控えは「如是我聞録」として、夜間寝後を利用して書き綴られていた。それを明治17年、自分も随聞当時の先生の年齢に達したところで、著者は私意を避け、つとめて平易な文体に書き直して、静岡報徳社から公刊の運びとなり、同年10月の第1巻から20年6月の第5巻まで、前後3年を費やして出版された。「二宮翁夜話」は、たちまち評判となり広く読まれ、初刊本から数10版を重ねたという。

参考までに、福住正兄氏原著の「はしがき」を次に掲げる。

『はしがき』

おのれ翁のみもとにありしこと七年なれば、折にふれ事にふれ、翁の論説教訓をききたること、いと多かり。されど洪なる鐘も、ちいさき答もてうちたらんには、その響きかすかなるをいかにかはせん。そのうえに、おのが耳は世にいうみそこし耳にしあなれば、道の心の深遠なる甘味なるは皆もれさりて、残れるはかすのみなり。かかるかすを書き残すは道をまどわす恐れなきにあらねば、たえて人には見せざりしかど、本年は六十一にしなりぬれば、残る齢も多からじ、せめて書き清めてだにとて草稿したるを、親しき人たち桜木に物せよとすすむれど、もとより才なく力なく、ことに文かくわざにうとければと、いなめど、中々にその折聞きのままにてかざらずつくろわぬ俗文こそよからめと、せめてやまず。今はいなむにことばなくて、かく世にひろむることとなりぬるゆえよしを、一言そうるになん。

ふくすみまさえしるす

のちに、二宮翁研究の第一人者である佐々井新太郎氏が、福住家に残されていた残篇を整理されて続篇48章を得た。そこで、これを加えて随筆式編集法を変更し、新たに天地人の3巻10篇に分類配列して、改訂増補版とされた。これが報徳文庫本である。

今回テキストに用いる注釈「二宮翁夜話」は、佐々井新太郎氏の子息佐々井典比古氏の手によるもので、内容は281章にわたる。

「天の巻」報徳の根元

第1篇 まことの大道 (1～ 45)

第2篇 天道と人道 (46～ 81)

「地の巻」報徳の法則

第3篇 因果輪廻の法則 (82～100)

第4篇 吉凶禍福善悪の法則 (101～113)

第5篇 無財から発財する勤儉の法則 (114～147)

第6篇 生活を安定する分度の法則 (148～162)

第7篇 幸福を永遠にする推譲の法則 (163～177)

「人の巻」報徳の仕法

第8篇 国家盛衰の根元 (178～196)

第9篇 治国の要道 (197～242)

第10篇 一元融合の報徳修練 (243～281)

幸いにテキストはとてもわかりやすいので、注釈はほとんど要らない。ただ、駆け足で読んでも、翁の思想の根源に触れるところは、入念にやらねばならない。なお、いくつかのポイントにしぼるとすれば、二宮尊徳資料館のHPにある次の六つが参考になる。

「天道と人道」

「至誠・勤労・分度・推譲」

「積小為大と一円融合」

「万象具徳と心田開発」

「開闢・生々発展」

その他、二宮翁の教えに関する文献は余りにも多い。ここで列挙するのは省略する。

なお、シラバスに参考書として記載した稲盛さんの著書「成功と失敗の法則」や、「人生の王道」＝西郷南洲に学ぶ＝などは、講義の随所で言及した。さらに、幼少の時分から親しんだ島津日新公「いろは歌」は、葉を皆に配って参考に供した。

8、はじめて『二宮翁夜話』を読んで驚いた

私は、はじめて『二宮翁夜話』を手にしたとき、本文を読み始めて驚いた。

【一】「誠の道と天地経文の論」

翁曰、夫（それ）誠の道は、学ばずしておのづから知り、習わずしておのづから覚え、書籍もなく記録もなく、師匠もなく、而て人々自得して忘れず、是ぞ誠の道の本体なる、渴して飲み飢えて食ひ、勞れていねさめて起く、皆此類なり、古歌に「水鳥のゆくもかえるも跡たえてされども道は忘れざりけり」といへるが如し、夫記録もなく書籍もなく、学ばず習わずして、明かなる道にあらざれば誠の道にあらざるなり、夫我教は書籍を尊まず、故に天地を以て経文とす……云々。とある。

えっ！ 師匠も書籍も記録も要らない……、一体、どういうことなの？

こちらは、勉強するために、学校に入り、よき先生の教えを受け、本を読むことこそが大切だと思っているところへ、冷水をぶっかけられた思いがした。

【三】「不書の経天地の真理」

翁曰、夫天地の真理は不書の経文にあらざれば、見えざる物なり、此不書の経文を見るには、肉眼を以て、一度見渡して、而て後肉眼を閉じ、心眼を開きて能見るべし、如何なる微細の理も見えざることなし、肉眼の見る処は限りあり、心眼の見る処は限りなし。

次いで、「俗儒を戒む」、「神儒仏三味一粒丸」の章など、瞠目するばかり。さらに、

【四六】「誠の道と天道を論じて人道に及ぶ」

翁曰、夫世界は回転してやまず、寒往けば暑来り、暑往けば寒来り、夜明れば昼となり、昼になれば夜となり、又万物生ずれば滅し、滅すれば生ず……云々。

夫天に善悪なし、故に稲と莠（はぐさ＝雑草）とを分たず、種ある者は皆生育せしめ、生氣ある者は皆發生せしむ、人道はその天理に順といへども、其内に各區別をなし、稗莠を悪とし、米麦を善とするが如き、皆人身に便利なるを善とし、不便なるを悪となす、爰に到ては天理と異なり、如何となれば、人道は人の立る処なれば也、人道は例えば料理物の如く、三杯酔の如く、歴代の聖主賢臣料理し塩梅して拵へたる物也、されば、ともすれば破れんとす、故に政を立、教を立、刑法を定め、礼法を制し、や

かましくうるさく、世話をやきて、漸く人道は立なり、然を天理自然の道と思ふは、大なる誤也、能思ふべし。

等々。

私は、戦前のどこも貧しい時代の農家育ちである。いつしか自分の体験と重ね合わせて読み進むことにもなり、私はすっかり魅せられてしまった。これが「二宮翁夜話」と私との出会いである。

9、レポートの提出とアフターケア

限られた講義回数で、学生に得心してほしいところが、どれだけ伝わったか。それを確かめる意味もあって、中間レポートと最終レポートで、輪読してもっとも感銘を受けた章を3～5挙げてその理由を述べさせた。

① 彼らが感銘を受けた章

学生が選んだのは、次の章であった。

「まことの道・一」	「根元に報いる・七」
「大道は水、書籍は氷・一二」	「一理を明らかにする・一四」
「社会の病をなおす道・一六」	「わが道は至誠と実行・二五」
「運と因果の理・八二」	「わが道は全樂の道・一〇一」
「禍福は方位でなく因果応報・一〇四」	「吉凶禍福は相對のもの・一〇五」
「善悪の根元・一〇七」	「積小為大・一一四」
「譲れぬ者は何もできぬ・一六九」	「湯ぶねの教訓・一七二」
「真の忠諫・一九三」	「遠きをはかる者は富む・一九五」
「好むところを後にする・二一二」	「租税は土地の天分に応ぜよ・二一六」
「滅びるべきものが滅びる・二二六」	「一家を船にたとえる・二四三」
「真の孝行・二四六」	「きずがなければ人に得られる・二五六」
「うそはまことに対抗できぬ・二六四」	「講演の妙、実現の不妙・二六七」
「翁の遺言・二八一」ほか	

うち「まことの道」、「根元に報いる」、「積小為大」、「譲れぬ者は何もできぬ」、「遠きをはかる者は富む」、「好むところを後にする」は、複数の学生が挙げていた。

② レポートのアフターケア

同じテキストの輪読仲間が、どの章に感銘して選んだのかは、メンバーにとって興味あるところであろう。そこで、答案をコピーしてメンバー全員に配布した。そして、各人に自分のものを読んでもらい、私が添削コメントして質疑応答を行う。

はじめ学生に戸惑いがみられた。小学生のとき作文を皆の前で読んだことがあるが、自分の答案を人に読み聞かせたことはないという。

改めて、なぜ輪読方式を採用したか。輪読は、読み間違ったり読めなかったりして恥をかくことがある。しかし「知るは一時の恥、知らぬは一生の恥」という。恥をかくのも学生の特権であると言いつけさせることであった。

レポートは、およそ次のように総括した。

- 1、設問の意味はよく捉えられており、答えの内容もまずまずと感じた。
- 2、感銘を受けて自省し、自らの生き方に資する姿勢が感じられた。
- 3、国語力が弱いことに、今更ながら暗然とさせられた。

総じて語彙が乏しい。誤字、脱字がある。文節の区切りと句読点の打ち方があいまい。したがって、文章の形がくずれて読みづらい、等々。

講義しながら気付いたのは、学生が辞書を机の上に置いてないこと。電子辞書という便利なものがあるのに、どうして置いてないのかと聞くと、怪訝な顔をする。しかし、言っただけのことはある。後には、電子辞書を置いて引くようになった。どうして推敲しないのかと聞くと、「すいこう？何ですか」と聞かれる。改めて「推敲」の由来を説き聞かせる始末。さらに国語力の大事さを、数学の大家藤原正彦氏の言葉を引いて強調した。

すなわち「小学校においては、一に国語、二に国語、三、四がなくて五に算数、あとは十以下である。中学高校と進むにつれて国語の重要度は低下する」云々と。

③ 学生のレポートを例示する

「まことの道」(一)

「まことの道」を挙げたのは、もっともだと強く感じたからである。私は今まで「まことの道」というのは、その人それぞれにとって正しいと思う道であり、人によって「まことの道」は違うと考えていた。しかし、それは私の皮相的な考えであり、二宮翁ははるかに踏み込んで考えておられた。二宮翁は「まことの道」とは、必ず天地の経文がお手本になったものであると教えている。であるから、自分の行動や人生が正しいのかどうかを知りたいときは、それが天地の経文にかなったウソ偽りのない「まことの道」なのかどうかを確かめればよいと思う。これからの大学生活の中で、「まことの道」を念頭に置いて勉強してまいりたい。(Mさん)

「根元に報いる」(七)

はじめにある「そなたたち、恩を受けても報いないことが多いだろう」という文章に、とても痛感させられた。普段の生活を考えてみると、朝起きて太陽をありがたいと思うこともなければ、父母や祖父母に特別感謝の気持ちを思うわけでもなく、地球の大切さを感じるわけでもない。生きていることが当たり前のような感覚である。しかし、太陽や地球、先祖の皆様が存在なしに私は生きてはいられない。人間は生命の根元である地球や太陽に恩を報いるどころか仇で返している。地球は地球上の生物全てのものであるのに、人間のつまらない利益追求のために破壊している。未来の繁栄を願うならば、今日の環境保全に必死で取り組まなければならないと思う。また人間も生物であるのだから、絶滅する可能性を有しているはずだ。だから目前の繁栄だけを追い求める欲を捨て、地球に恩返しをしていけば、必然と命は受け継がれていくものだと思う。(M・Tさん)

「大道は水、書籍は氷」(一二)

『大道は、たとえば水のようなもので、よく世の中を潤沢して滞らないものだ。そのような大道も、一たん筆で書いて書物にしてしまうと、もう世の中を潤沢しなくなり世の中の用に立たなくなる』と翁のことばにある。

この章を選んだのは、二宮翁が第一に学ぶものに対して、考えていることをよくあらわしている言葉であると感じた。

いくら素晴らしい学問をおさめていても、それを水のように、すべての人を潤すことができなければ確かにそれは意味がない。ただの自己満足かもしれない。それは世の中で最先端の研究として評価されるものかもしれない。しかし、二宮尊徳の生きた当時読み書きができるかできないかという庶民に対して、氷となった学問は不必要であっただろう。

現在の私たちは、人から学ぶという立場であり、大学に来ているが、氷を水にして教えてくれる先生は少ないかもしれない。しかし今の私たちは、氷であってもそれを受け取って水として用いることができるようにならなければならない。(Y君)

「わが道は至誠と実行」(二五)

「わが道はもっぱら至誠と実行にある。だから鳥獣・虫魚・草木にもすべて及ぼすことができる。まして人間はいうまでもない」と翁の言葉にある。

この章を選んだのは大変簡潔でわかりやすいからだ。逆にこの章だけでも理解することができれば、まことの道を進むことができるだろう。

どんなに人を欺くことができるすごい弁舌があっても、その弁舌をふるって作物を育て収穫することはできない。何の意味もないのだ。知恵があっても学があっても、至誠と実行とがなければ事はならない。それを、今まで分かっていたようで分かっていた。この章でそれを得心することができた。まずは、基本である農作物を育てるには至誠と実行が必要である。また、まわりによき人を得ようと思ったら、それも至誠と実行が必要である。至誠と実行を持っていれば、どんなに人々から愛されるであろうか。(A君)

「善悪の根源」(一〇七)

二宮先生は最初に、善と悪の違いについて「本来を論ずれば、善も悪もない」と述べています。この冒頭だけ読んだ時は、どういう意味か分らなかったけど、読んでいくうちになるほど思うことがたくさんありました。そもそも二つの違いについて「人間の身の勝手な都合からできたもの」というように、人間によって造られているのだということに気付かされました。そして「善」か「悪」なんて人それぞれ違うことに納得しました。

そして、たとえば世の中から犯罪がなくなってほしいと、私たちが思っても、二宮先生は「半分を善とすれば、あと半分は必ず悪になる。それを、あと半分にも悪がないように願うことは、出来ないことを願うものだ」といわれます。悲しいことだけど「悪」をなくすことは無理なのかなと思わざるを得ないのです。したがって、世の中を生きてゆくには、常に「善」を心がける以外にないと思いました。

(M君)

「積小為大」(一一四)

「大きな事をしたいと思えば、小さな事を怠らず勤めるがよい。小が積もって大となるからだ」と翁のことばにある。この章を選んだのは、今の自分に目標を達成するためのアドバイスをされたような気がしたからである。

この言葉は、何をするにも言えることだと思う。マラソンをするにも少しずつトレーニングをしなければいけないし、バスケットで試合に出ようと思っても、まず基礎であるドリブルやパスなどができなければ話にならない。

私はいま、建築士になるという目標を達成するために、大学の建築学科で勉強している。建築学科は

細かい作業が多く他学科に比べて大変な作業量で、ほとんどの時間をそれにあてている。なぜこんなことをしているのだろうかと思いながらも、将来のためだと自分自身に言い聞かせている。しかし、やはり小さな事を積み重ねなければ、目標を達することはできない。安易に建築士になることはできないのだ。だからこそ今は、小さな事を怠らずに一生懸命勤めることにしようと思う。いつかは、二宮尊徳の言葉でいまの自分があるのだと言えるようになりたい。(Y君)

「滅びるべきものが滅びる」(二二六)

翁の言葉に、「暴風で倒れた松は、前から雨露がはいってうつろになって、すでに倒れるようになっていた木だ。大風に破られた垣根も、杭は朽ち、なわは腐って、破れるばかりになっていた垣根だ」とある。この章を選んだのは、二宮尊徳の例えのわかりやすさに感心し、滅びるべきものが滅びているということを教えてもらったからだ。

世の中には新しくできるものもあり、その中の大部分は滅びていくものである。その滅びていくものには必ず滅びる理由があり、その対処をしていなかったから滅びたのだ、ということをつくづく実感した。身近なもの、例えば良好な人間関係や約束ごとが、壊れてしまうのは、それが壊れるような状況だったから壊れたのである。また形の大きな、頑丈で壊れそうでないものでも壊れてしまうのは、直すべきところを直さなかったから起きた結末ということである。

しかし逆にいえば、形のあるものもないものも、間違った対処をしなければ、滅びることはなく維持することができるということである。自分の身を滅ぼさないためには、間違った対処をしないことである。それは、ひたすらに真面目に生きることであり、よく働きよく学び、そしてすべての人を大切に生きていくことだと思う。(F君)

「真の孝行」(二四六)

この章を選んだのは、自分には全くできていないことであり、今後努力してできるようにしなければならなかったからです。自分は親孝行とは、親を喜ばしてやることとばかり思っていました。二宮翁のことばで、親孝行とは、遠く離れたところにおいても、親に心配をかけないことである、と思うようになりました。自分は今、実家から遠く離れた鹿児島に住んでいるが、常日頃の心掛けもなっておらず、親に心配をかけるようなことばかりしている気がします。親の近くで、心配をかけていた自分が、遠くに来たからと言って心掛けが変わるわけでもなく、行いも悪くなる一方のようなので、親の心中を察すると、自分の至らなさを痛感させられます。この状況を変えるには、二宮翁のいわれるように、身持ち心持ちをしっかりと、日々真面目に、謙虚にそして、誠実に生きていく必要があると感じました。ただ、これは、一朝一夕にできることではないので、常に意識し、生活していく必要があります。今後の人生において、今変わるか変わらないかは、非常に大きな問題なので、真剣に自分と向き合っていかなければならなかったと感じました。(A君)

「うそはまことに対抗できぬ」(二六四)

最近、世間では偽装や偽造などウソの報道が多過ぎると感じている。日常の会話で交わすことばにしても軽薄で重みがなく、ついウソが口から出てしまうのではないかと思う。

翁のことばに「近ごろの世の中は、うそでもさしつかえなく渡れるようだが、これは、相手もやはり、うそだからだ。うそとうそ同志だから、すきもなく、滞りもない。しかし、もしもうそをもってまことに対するときは、すぐにさしつかえるはずだ。たとえば百枚の紙から1枚だけ取ってもわからないよう

だが、99枚まで数えれば不足することがあらわれる。うそはまことに対抗できないものだ」とあるが、私はこの言葉に納得させられた。正直、嘘だらけの世の中になっていることを残念に思っている。だが、まだ問題として指摘されている分、世の中すべてが嘘となってしまったわけではない。まことの人がたくさん居るのである。まことの人が増えていく世の中にしていかねばならないと思う。そのためには、まず自分自身が嘘のないまことの道を歩まねばならないと思う。(Kさん)

10、むすび

「二宮翁夜話」を読めば、必ず心の琴線に触れる箇所に出会う。その教えに感動すれば、よしっ！と、自分に立志の心が生じる。

立志が生じれば、態度が変わる。態度が変われば、習慣が変わる。習慣化すれば、人格が変わり、人間が変わることは、先述したとおりである。私の意図は、まさにそのことである。学生のレポートの随所に、それが読み取れて嬉しい。彼らは、ひとしく「積小為大」の教えを我がものに行っていると感じた。Y君のレポートには「いつかは、二宮尊徳の言葉で今の自分があるのだと言えるようになりたい」とある。

彼らが「二宮翁夜話」に出会ってよかったと思ってくれれば、教師冥利に尽きる。

以上、問題意識と講義の組み立てと進め方、その結果について概要を述べた。肝腎の翁の思想と教理は、巨大かつ深遠であり、浅学の私の講義ノートは未完のままである。一方、僅かな理解でも、それが実践されなければ翁に学ぶ意味がない。講義で語った翁の教えに因む私の体験談は、紙幅の関係もあり割愛する。ともあれ、報徳の「知行合一」は、翁に魅せられた私にとって終生の課題である。日々精進する以外にない。